

イギリスのドラマ教育の考察 (9)

——エクセター大学ドラマ学部「応用されたドラマ」プログラムの検討——

小林 由利子*

Drama in Education in England (9)

— MA in “Applied Drama” Program at University of Exeter —

Yuriko KOBAYASHI

Abstract

This paper analyzes the MA in Applied Drama Program at University of Exeter in England. The objective of this paper is to clarify the meaning of “Applied Drama” and the characteristics of this program. This study found: (1) TIE and DIE use drama and theatre as the medium in educational settings but “applied drama” can be used in any kind of social setting. For example, schools, hospitals, jails, communities, rehabilitation facilities, institutions, homes, companies, and many kinds of places. (2) The MA in “Applied Drama” Program gives the student the theories and the practices for using drama and theatre and tries to connect them to each other. (3) The main technique in drama and theatre of this program is “Compound Stimulus”.

Key words: Applied Drama, DIE, TIE, Compound Stimulus

1. はじめに

エクセター大学ドラマ学部 (UK) には、TIE (Theatre in Education) と地域演劇活動の専門家であるジョン・ソマーズ (John Somers) による「応用されたドラマ (Applied Drama)」という修士プログラムがある。本論では、このプログラムを取り上げて検討することを通して、「応用されたドラマ」とは、どのようなプログラムであるかを明らかにすることである。

*教授 ドラマ教育・演劇教育

2. エクセター大学の大学院修士課程プログラム「応用されたドラマ」

「応用されたドラマ」プログラムは、教育やコミュニティー活動においてドラマや演劇を応用するための理解を深め技術を身につけたい人を対象にしている。いいかえれば、「応用されたドラマ」とは、芸術としてのドラマと演劇そのものを楽しむというより、ある目的のためにドラマと演劇を他の領域に応用して、ドラマと演劇の持つ効用を利用することであると考えられる。

プログラムの内容は、学生がすでにもっている実践と理論をさらに進めるために、実際に経験したり、考えたりするようになっている。体験的学習を演習形式で支えるように構成されている。学生たちは、広範囲に渡る読書と集中的な記述をすることが求められている。

1年間の修士プログラムなので、要求される課題図書が多数ある。さらに、経験しなければならないドラマ活動、それらを克明に記録しなければならない課題、毎週出されるレポート、課外授業のドラマ・クラブの活動計画と実施と反省と記録、特別演劇鑑賞課題とその評論、TIEの計画・制作・実施・記録、特別ワークショップやセミナーへの参加とレポート、修士論文という内容で、実践と理論とを相互に関連づけるようにプログラムが構成されている。

このプログラムの一つの傾向は、留学生が多く、平成14年度は、ギリシャから5名、ポーランドから2名、韓国から1名、台湾から1名、アラブ首長国連邦から1名、地元出身のイギリス人が1人、社会人学生1名の計12名であった。従って、このプログラムは、各学生が自国に帰って、エクセター大学で学んだ「応用されたドラマ」を実践できるように配慮されているといえる。

たとえば、第1に、TIEの制作過程・実施過程をビデオで記録し編集して各国語のナレーションをつけそれを持参させている。第2に、1学期の授業で実施されるドラマ活動は、すべて記録し考察しポートフォリオとして一冊にまとめさせ、授業終了時に提出させ、コメントをつけて返却している。第3に、毎週提出させているレポートは、短いものから長いものになり、最終的に修士論文が書ける英語力をつけるように構成されている。第4に、学生の修士論文のテーマは、各学生が自国に帰って仕事につなげられるような、これからの10年を視野に入れて、方向づけが実施されている。第5に、授業で理論と基本的技術を提供し、課外授業のドラマ・クラブでそれらを指導者であるソマーズのもとで、各学生が実践するような構成になっている。第6に、1月から始まる2学期には、それぞれの学生の興味にそって、研修先を決定し「応用されたドラマ」の実習を実施している。たとえば、病院でドラマ・セラピーの経験をドラマ・セラピストのもとで経験する、刑務所で専門家のもとでドラマを使った活動をする、地

元の小学校で担任教師を相談しながらドラマ活動を実施するなどがある。それぞれの学生が自分の興味と将来を踏まえて実習先を決定し、連絡を自分でとり、専門家のもとで経験を積めるようになっている。第7に、4月から始まる3学期は、チューターによる個人指導を通して修士論文の作成が主体になる。修士論文の締切は、8月末日に設定されている。

このようにエクセター大学ドラマ学部の「応用されたドラマ」プログラムは、理論と実践が組み合わせられた1年間の凝縮されたプログラムとして構成されている。

3. 「応用されたドラマ」プログラムの授業内容の検討

(1) リサーチ方法論 (Research Methodology) (1 学期)

授業のねらいは、次の3つである。第1に、「人文科学における最新の研究方法の情報を提供すること」¹⁾ (Somers, p. 10) である。第2に、「初めての研究におけるよりよい実践を行い励ますこと」 (Somers, p. 10) である。第3に、「論文執筆のためのリサーチの基礎を形成するための参考文献及びデータベースを作成する方法を伝授すること」 (Somers, p. 10) である。

授業内容は、図書館の使い方、インターネットの使い方、テーマの絞り方、リサーチ・プランの設計、計画書の作成、発表という流れになっている。

具体的に、各学生はリサーチ・プランの設計のところで、チャート図を書き、お互いに見せ合うことをしている。学生が独自のチャート図を考えだす作業過程で、自分がどのような研究者をめざし、どのようなリサーチをしたいのかを考えさせるようになっている。

エクセター大学ドラマ学部は、実践を非常に重視し、実践と理論とのつながりを常に意識しながら、授業が実施されている。さらに、実践的活動を論文の一部として組みこまれた博士過程もある。学部生は、学んだことの総仕上げとして実践的論文という授業を課せられ、4～6人のグループに分かれ、それぞれが実験的な演劇作品を創作する。たとえば、キャッシュ・バーで政治的演劇を上演する、電車と海岸を使ってパフォーマンスをしたり、小学校に巡回演劇公演をしたり、エクセター聖堂と街中でパフォーマンスをしたり、駐車場を使って演劇を上演したり、エクセター博物館とタイアップしてエクセターの地元の宗教的人物を取り上げて教会で演劇作品を上演したりする。これらのことを通して、プロの演劇人になるための技術と経験が積み重ねられるようになっている。学部の特徴は、ほとんどが英国全土から集まった厳しい試験に合格したイギリス人がほとんどであるということである。

(2) 応用されたドラマの理論的概観 (Theoretical Aspects of Applied Drama) (1～2学期)

この授業のねらいは、「コミュニティーと教育で実施されるドラマについての鍵となる考えを伝えること」(Somers, p. 11)である。たとえば、「文化的影響力としてのドラマと物語」(Somers, p. 11)と「ドラマ活動を推進する人の役割」(Somers, p. 11)とについて考えることである。

期待される成果は、学生たちが、次の6つのことを獲得、あるいは理解するようになることである。第1に、「物語と神話とドラマとアイデンティティーについて」(Somers, p. 11)理解することである。第2に、「社会的文化的儀式としてのドラマについて」(Somers, p. 11)理解することである。第3に、「芸術家の役割について」(Somers, p. 11)理解することである。第4に、「ドラマのための文脈について」(Somers, p. 11)理解することである。第5に、「ドラマについての批判的考察とリサーチについて」(Somers, p. 11)理解することである。第6に、「各学生の実践を発展させるための準備をすること」(Somers, p. 11)である。

授業内容は、次の8つの具体的な教授法と学習アプローチについて考えるようになっている。第1に、「物語と神話とドラマとアイデンティティー」(Somers, p. 11)について考えさせることである。第2に、「社会的文化的儀式としてのドラマ」(Somers, p. 11)について考えさせることである。第3に、「芸術家の役割」を知ることである。第4に、「ドラマのための文脈」(Somers, p. 11)を使えるようになることである。第5に、「ドラマについての批判的考察とリサーチ」(Somers, p. 11)ができるようになることである。第6に、「ドラマにおける代表的実践者と考え方」(Somers, p. 11)について知ることである。第7に、「演劇とドラマと学習と熱意」(Somers, p. 11)をもてるようになることである。第8に、「ドラマ・リーダー及びドラマ教師の役割」(Somers, p. 11)について考え、体得することである。

学生たちは、毎週読まなければならない資料が与えられ、さらにそれについて自分の視点からレポートを書くことが求められ、次の授業でそのことについて議論するという過程を繰り返す。これらのことを通して、ドラマ教育と演劇教育についての理論の概要を獲得していくようにプログラムが構成されている。

(3) DIE (Drama in Education) と TIE (Theatre in Education)

授業の主なねらいは、次の4つである。第1に、「DIEについての基本的な理論と実践について考えること」(Somers, p. 12)である。第2に、「TIEについての基本的な理論と実践について考えること」(Somers, p. 12)である。第3に、「理論と実践について暗闇から徐々に明るみにでてくるような理解の仕方で自分自身と他者と一緒に作業する機会を提供すること」

(Somers, p. 12) である。第4に、「学校あるいは児童青少年にかかわる社会教育施設において実践的活動を発展させることができるようになること」(Somers, p. 12) である。

期待されている成果は、次の2つである。第1に、「学生たちが、DIE と TIE についての歴史とこれらの発展における観念的影響についての理解を獲得すること」(Somers, p. 12) である。第2に、「学生たちが、他者との関係の中で自分自身の実践の場を見つけることができるようになり、その中で個々の学生独自のモデルとなる実践的表現を発展させていくこと」(Somers, p. 12) である。

DIE の授業内容は、ソマーズのリードによる様々なドラマ活動を実際に経験することを通して、DIE の理論と実践について考えるようになっていく。学生たちは、経験した活動について克明に記録し、自分の感じたこと、考えたこと、必読書と参考文献との関係性について考え自分自身のためのポートフォリオ（日記と画帳とレポートと資料等をまとめたファイル）を作成し、3学期終了後に提出する。実際に自分の経験したことを詳細に記録することを通して、学生は活動についての理解を深め、理論について記述を通して学んでいる。

TIE の授業内容は、実際にテーマの設定、資料収集、演劇部分の制作とドラマ活動部分の計画、学校との交渉、子どもたちとの活動実践、これらの過程の記録と議論とレポート作成という流れになっている。今年の学生たちは、何もないところからグループ活動をしながら、TIE の活動を制作し実施するので、試行錯誤の連続のようであった。テーマの設定に時間がかかり、アイデアの選択に悩み、リハーサルでお互いに意見の食い違いと交渉に苦しみ、子どもたちとの活動に恐怖するようなさまざまな喜怒哀楽が、混在した経験になっていた。

しかしながら、TIE プログラムを実際に子どもたちと活動する経験を通して、それまでの過程に道筋を与えるようになっていた。これらの過程はすべてビデオに記録され、活動終了後に編集され、学生の自国語のナレーションがつけられ、帰国時に持参できるようになっていた。

このように DIE と TIE の授業は、まず実践を通して体験的に考え、理論づけるようになっている。この体験自体をリサーチとソマーズは、とらえているといえる。

(4) 社会的介入としてのドラマと演劇 (Drama and Theatre as Social Intervention) (2 学期)

この授業のねらいは、次の2つである。第1に、「社会的介入としてのドラマと演劇についての理論と実践について考えること」(Somers, p. 13) である。第2に、「慣例にとらわれない状況（たとえば、不登校施設、保護観察施設、児童福祉施設、職業訓練所、効果的コミュニケーション研究所、リーダーシップと管理能力開発研究所、犯罪グループなど）においてドラマを適切にかつ創造的に使うことについて考えること」(Somers, p. 13) である。

期待されている成果は、学生たちが、次の3つを達成することである。第1に、「社会的介入としてのドラマの歴史とその発展と最近の傾向について理解すること」(Somers, p. 13)である。第2に、「それを基盤にして自分の専門的なドラマ活動を位置づけられるようになること」(Somers, p. 13)である。第3に、「それぞれのプロジェクトを管理できるようになること」(Somers, p. 13)である。

授業内容は、大きく分けて次の5つである。第1に、「いくつかの適切で優れた実践を見学すること」である。第2に、「その分野の実践を真似てみることを通して、社会的介入のためのドラマについての一連のモデルを探索すること」(Somers, p. 13)である。第3に、「レポートを提出することで理論づけを行うこと」(Somers, p. 13)である。第4に、「社会的介入としてのドラマのモデルの一つを学生が選択し、コミュニティの中で個人的に体験してみる」と、(Somers, p. 13)である。第5に、「それぞれの学生が選択した施設において対象グループの人たちと作り上げたプログラムを巡回公演すること」(Somers, p. 13)である。

この授業は、実際にコミュニティで活動している実践者とソマーズとによって実践を通して体験的に指導されていた。この経験を通して、学生たちは、将来の自分の働くコミュニティについて具体的に考え、同時に技術も身につけていくことができる。DIEとTIEという名称を使用すると、ドラマと演劇を媒介として使用できるのが、教育の場に限定される。一方、「社会的介入 (social intervention)」という言葉を使うことにより、社会全般において、ドラマと演劇を他の目的のための媒介として使用する可能性を示唆することができる。したがって、「応用されたドラマ」は、教育だけでなく広く社会でドラマと演劇を応用させていこうとする意味が含まれているといえる。

(5) 職業経験 (Placement) (2学期)

この授業のねらいは、特定の文脈におけるドラマの使用を探求するために、自分の興味がある分野の専門家のもとで職業経験を積むことである。学生たちは、自分で連絡を取り、職業経験の場所を探すことになる。ソマーズは、場所のリストを渡し、手紙の書き方を示し、専門家の紹介するなどして、学生たちが、自ら実習場所を決定し、連絡をとり、実習の契約までの手助けをする。これは、実際に学生が、卒業に直面する就職活動の模擬体験にもなっている。一方、1学期で学習した理論と方法論を現場で実践する機会にもなっている。これらの経験が、さらに修士論文につながられる。

(6) 修士論文 (3 学期と夏休み)

この授業のねらいは、リサーチ・プロジェクトを完成させることである。この授業は、チューターによる個人指導によって実施される。このプログラムの総まとめといえる授業である。学生たちは、テーマの設定から、資料とデータの収集、リサーチの設計と、自らが主体となって取り組む授業になっている。これは、「応用されたドラマ」の1年間の総まとめの授業である。

(7) その他の関連する活動

①カンファレンス

この授業は、特別講師と学生たちによる、プレゼンテーションにより、新たな視点を得ることをねらっている。学生同士が、お互いに知り合う場にもなっていた。実際の授業では、ポーランドからの二人の学生が、自分の大学のプログラムについて、授業で学習したテクニックを使いながら、劇的に紹介していた。

②ドラマ・クラブ

水曜日の4時半から6時まで、大学のスタジオで実施される。地域の学校から9歳から13歳までの子どものグループと、5歳から8歳までのグループに分かれて、ソマーズの指導のもと学生たちが、子どもたちとドラマ活動を実施する。最初の2～3回は、ソマーズがドラマ・リーダーとして学生たちに観察学習させていた。その後は、学生たちがドラマ・リーダーとなり、活動を立案、実施、記録していた。ソマーズは、スーパーバイザーとして活動を見守っていた。

③演劇鑑賞

1学期間に3つの選択された演劇作品をグループで鑑賞し、自分の感じたことや考えたことから出発して、授業との繋がりを見出しながら、短いレポートを提出する。返却されたレポートは誤字脱字等が訂正されていて、全員のレポートが各自に配布される。これにより、他者の考えを知ることができ、新しい視点を見出すことができるようになっている。エクセターは、ロンドンから電車で2時間半のところにある小都市であるが、大学町ということもあり、時々実験的演劇や芸術性の高い映画やコンサートが上演されていた。今回は、社会的演劇、インドのカタカリ、マスク劇の鑑賞が課題として出されていた。

④ワークショップ

エクセター市内だけでなく、いろいろな場所（ロンドン、レディングなど英国各地）へ行ってワークショップを受講する場合もある。「応用されたドラマ」についての理解を深めるため

役立つワークショップが選択されていた。2002/3年度は、ドラマ・セラピーの2日間のワークショップがエクセター大学であり、経験を通して、議論を導きだしていた。

⑤学部内パフォーマンス観察見学

大学院生及び学部生による、さまざまなパフォーマンスが、学期中に実施され、大学の掲示板に詳細が提示される。学生たちは、できるだけ参加するように示唆されていた。

以上の授業内容は、すべて互いにリンクしていて、イギリス人だけでなく、外国から学びに来ている学生が、自国に帰ってからすぐ実践できるように配慮されていた。ビデオは、教材でもあり、学生たちが、自国に帰ったときに、他者に活動内容を理解させるための道具にもなっていた。ポートフォリオは、実際にドラマ・リーダーとして活動を実施するときのハンドブックになっていた。「複合的刺激物」は、教材として使用できるし、他の学生たちの例も見ることができ、作り方の枠組を理解すれば、自分で次々に新たなものつくれる可能性があり、ドラマ活動をつくりだすための効果的な導入になる。

3. ソマーズのドラマ活動例：「複合的刺激物」から

ソマーズのドラマ活動の顕著な特徴は、「複合的刺激物」を効果的に使って、参加者から物語を引き出すことであるといえる。どのような入れ物に刺激物を入れ、どこで発見されたか、何を入れ物に入れるかということが、この活動において非常に重要であるといえる。

(1) 「複合的刺激物」の具体例

①シガー・ケース

古いチェストを骨董店で買ったら、その一番上の引き出しにリボンのかけられたシガー・ケースが見つかったという設定である。中身は、誕生日を祝う古い絵葉書、ブローチ、正直という花言葉のある花の種、グループ写真（同じブローチを身につけている人が写っている）、手紙、ドライフラワーなどである。

②学校用のリュックサック

いじめにあっている子どもが、持っていたものという設定である。筆記用具やメモの入ったペンシルケース、鍵のついた日記帳（鍵の暗誦番号をどこかに隠しておく）、ノート（鍵の暗誦番号を書いておく）、教科書などである。

③ベルト付きの古い考古学ボックス

テーマとして、死を取り上げた活動である。子どもたちは、すでに学校の授業で黒死病について学習している。エクセターの地図を教室のどこかに置いておく。このボックスは、エクセター博物館の倉庫から見つけられたという設定である。中身は、古い土の付着したいくつかの木片、ドライフラワー（ネームタグ付）、土がついていて破けている古い手袋（ネームタグ付）、古い硬貨の入ったコイン入れ（ネームタグ付）、古い蹄鉄（ネームタグ付）、古い袋に入った麦の種（ネームタグ付）、14世紀に書かれたと記載されている古い絵、手紙の断片、メモの断片、古い布（ネームタグ付）などである。これらの中身が見つけられた場所をボックスの上に張りつけておく。（学校が建てられた場所にしておく。）

④アンと書かれた古い靴箱

アンの母親のベッドの下からこの靴箱が見つけられたという設定である。中身は、ベビー服、乳児用の靴下、子どもが作った雪だるまの人形、アンが書いた母の日のカード、お葬式の案内状（アンの友だちの両親から）、港町に住むアンが友だちの家を訪ねたときの両親への絵葉書、アンの父親から母親にあてた手紙、病気についてのインターネットからの資料、病院のアポイントメントのカード、担当医からアンの両親にあてた病状を説明する手紙などである。

⑤古い布袋

古い家の屋根裏部屋から見つけられたという設定である。中身は、たくさんの古い鍵が通されたキーフォルダー、鍵かけのフック、古い絵などである。

⑥ブリキでできた家の形をした缶

ブリキの家の箱が、亡くなった父親の引き出しから出てきたという設定である。手紙、地図、ドイツ語で書かれたレストランのメニュー、写真のネガ、水を浄化する錠剤、草原に飛行機が着陸するための地図などである。

(2) 活動例：「アンと書かれた古い靴箱」から

リーダーは、箱と緑の布を抱えて教室に入ってくる。リーダーは、静かに「この箱は、スーザン（アンの母親ということが後で推察される）のベッドの下から見つけられました。」という。そして、緑の布を床に広げ、「ああ、ここに名前が書かれています。読めますか？」と参加者に問いかける。「ア・・・ン・・・アンかな?」、「そう、アンと思う。」と数名の学生から

反応がある。リーダーは、「そう、アンと書かれていますね。あけてみましょう。」という。「一つ一つ取り出してみましよう。」といいながら、1人の参加の前に箱を差し出す。参加者は、興味のあるものを取り出し、何であるかをいい、手紙の場合は、他の参加者に読んで聞かせる。そして、取り出したものを布の上に置く。このように箱の中のものをすべて参加者1人1人が取り出して並べる。

リーダーは、参加者を3名ずつのグループに分け、もう一度それぞれの中身を見て、だれが、なぜこのようなものを箱に入れたかを話し合うように問いかける。それぞれのグループで、登場する人物、なぜそれらが箱に入れられたのか、それぞれの物は何を意味するのかを考え、話し合うようにリーダーは、言葉がける。

リーダーは、登場人物として質問したい人を決め、ホットシート（1人が登場人物になり、その他の人が質問をすることに答える活動）をするように指示する。いろいろな登場人物についてホットシートを行う。

各グループは、いくつかのシーンを設定し、登場人物になり即興劇を演じてみる。リーダーは、そっとそれぞれのグループが行っていることを見守り、必要を感じた場合は、介入して助言する。リーダーは、いくつかの即興シーンを組み合わせて、物語の流れを見つけるように方向づける。

それぞれのグループが、一連の即興シーンを作り上げたところで、お互いに見せ合う。そのときリーダーは、ライトを操作し劇的雰囲気盛り上げる。シーンが変わるときは、フリーズすることをあらかじめ指示し、ライトダウンしてからシーン・チェンジをすることと、ライトアップしてから動き出すことを指示する。さらに、シーンの流れを上演前に再確認し、ブラック・アウトからシーンを始めるように指示する。

全員が、シーンを見せ合ったところで丸くなって座り、学生それぞれが、自分の感じたこと、考えたことを話し合う。

あらかじめ十分にリーダーによって選択され、物語の可能性が検討された「複合的刺激物」を提示された場合、自然に物語がそれぞれの参加者から引き出される現象が発生していた。この活動においては、どのような物を選択し、組み合わせるかということと、リーダーの誘導とが、重要であると考えられる。

4. おわりに

エクセター大学ドラマ学部修士プログラム「応用されたドラマ」は、ドラマ活動そのものを

イギリスのドラマ教育の考察 (9)

楽しむ活動ではなく、ある特定のコミュニティーの抱える問題に着目して、その問題を解決するため、あるいは問題が深刻になるまえの予防としてドラマを応用しようとする活動であるといえる。したがって、ソマーズの取り上げるテーマは、深刻な社会問題が含まれているものが多いと指摘できる。

今回は、活動例を上げるところまでしか至ることがなかったので、今後は「応用されたドラマ」のプログラムをさらに詳細に記録し、活動内容を考察していきたいと考える。

注

Somers, John, *MA Applied Drama Course Guide 2002/3*, University of Exeter, 2002.

(以下、本書よりの引用は、Somers と略記し、ページ数を括弧内に入れて本文中に示す。)

参考文献

Neelands, Jonothan., *Making Sense of Drama: A Guide to Classroom Practice*, Heineman Educational Books, 1984.